

「自己投影」作家フィッツジェラルド

— “Winter Dreams”を中心に —

兼 定 和 憲*

‘Self Projection’ Writer Fitzgerald

— Centering around “Winter Dreams” —

Kazunori KENJO

Fitzgerald created his works on the experiences of his life, and was the writer who gave an account of himself. Of course, he wrote a fiction, but while writing, he threw self-image colorfully on his works. In the end, he told of himself.

His experiences were always built up swaying between the dream world and the actual world. Also, it is said that he created and wrote out the story on his experiences. Fitzgerald self-projected his dream of youth finely before us through his literary works.

Thus, his works are tinged with an autobiography. Imagining from an infant to his later years, yes, to his future, the feelings and senses of the then and there writer are represented vividly through his experiences. Comparing the tragic characters of his works with his biography, it can be said that he lived the literary world itself.

He is the writer who embodied the generation in person. That is to say, Fitzgerald lived the nineteen-twenties and the nineteen-thirties in person, and self-projected his experience itself and described his works.

Fitzgerald (1896-1940) は、ミネソタ州の ST. Paul に生まれた。アイルランド系カトリックの宗教的雰囲気濃い中流家庭であった。一人息子であった事情もあって、母親に甘やかされて育った。1913年17才で東部へ出てプリントン大学に入学し、在学中から創作活動をおこなっていたが、1917年の秋、大学を卒業せず officers' training camp へはいった。軍務に服しながらも週末、余暇を利用して1篇の小説を書き、戦後それを書き改め発表した。それが最初の長編 *This Side of Paradise* (1920) であった。裕福な家庭に生まれて、母親に甘やかされて育った青年 Amory Blain を中心に戦後の解放された若い世代の生きざまを描いたが、自叙伝的なこの作品によって、Fitzgerald は一躍有名になり、Glenway Westcott の言葉を借りれば、*“a kind of King*

* 事務局

of our American youth”¹⁾と見做された。

彼は特に、短編の中で、彼の少年時代から晩年に至るまで、彼の生涯で経験した事件の背景となった時代を鮮明に描写している。それは1920年代の Jazz Age と1930年代の不況の時代である。20年代といえば、騒々しく飲んで歌って明け暮れた petting party 盛んなりし時代ではあったけれど、また無限の可能性を伸び伸びと発展させる事も出来た時代で、弾力性のある華やかな時代でもあった。批評家達は、Fitzgerald の double vision について注目するが、それは、快樂の時代に生きながら、一方で、その時代を冷静に見つめよく批判し得たことを意味するものである。

自分の生まれた時代と場所とに、どのように折り合いをつけ生きていくか、ということは、多少なり誰しも考えることだ。自己の生いたちへの complex や、都会人への憧憬と軽蔑への混ざった感情を抱く人物は、彼の作品中にしばしば姿を現すが、それは、作者の分身なのだ。彼は、自己の人生経験に基づいて作品を創作し、自己を物語る作家であった。勿論、フィクションを書いたのであるが、書いているうちに、作品に自己を色濃く投影し、結局、自己を物語ることになった。彼の経験は、いつも夢の世界と現実の世界の両極を揺れ動きながら、構築されたものであり、その経験を基に物語を作り出し書き上げていったとも言える。Fitzgerald は、自分の青春の夢を自己の文学作品を通して、私達読者の前で見事に自己投影して見せてくれた。

彼は、元来 romantic なエゴイストであった。幼少の頃からいつも大きな夢を抱いていた。学生の頃、football をやっていた時は、No.1 の player になろうという夢を持った。また偉大な作家になろうと志した。何事にも top class を志向し、top class の女性だけが目についた。

初めて激しい熱烈な恋愛をしたシカゴ出身の美しい女性である Ginevra King は、大金持ちの娘で、当時貧しい彼は、深い挫折感を味わう。その苦い経験は、名作“Winter Dreams”や代表作と言われる The Great Gatsby の中に自己投影されることになる。

1918年彼は、Alabama 州 Montgomery 近くの camp へ行き、Ryan 少尉の副官になった。彼が Montgomery Country Club の dance party でアラバマ州最高裁判事の娘 Zelda Sayre と出会ったのは、この時であった。Zelda は、18で、素晴らしい金髪の、美しい娘で、彼の心を捕らえた。彼女も Irish charm を持った美男子の中尉を恋した。彼は、友人への手紙に彼女のことを“the most beautiful girl in Alabama and Georgia”²⁾と書き、自分の note へ“I didn’t have the two top things : great animal magnetism or money. I had the two second things, though : good looks and intelligence. So I always get the top girl.”³⁾と書いた。

顔と知性に自信のある彼は、最も美しい娘 Zelda と婚約したが、すぐ結婚することは出来なかった。彼は、1919年軍隊から復員するとすぐ New York へ行き、野心に満ちて活動するから成功を待ってくれと言う意味の電報を Zelda に打った。新しい題名で小説を書き直すために ST. Paul の故郷へ帰った。出来上がった小説を今度は、Scribners が受け取った。この小説の出版と共に結婚することになった。これが This Side of Paradise で、1920年3月に出版された。

この成功によって、1920年4月、彼等は ST. Patrick’s Cathedral の教会で結婚した。1921年の夏、Zelda のお産のため彼等は ST. Paul へ帰った。女の子が生まれ、Frances Scott (Scottie)

と名付けた。子供が生まれるとすぐ New York へ帰り、Long Island の Great Neck に住んだ。そして、ここで多くの人々を招いては party を開いた。この頃の生活について、彼はこういつている。“It became a habit with many world-weary New Yorkers to pass their week-ends at the Fitzgerald house in the country.”⁴⁾

彼の描く主人公は、中産階級の生い立ちの中で、名誉心、礼節、勇気という美德を身につけた立派な魅力的なアメリカ青年で、皆立派な才能を持っており、それを生かして良き生活の image を実現しようとする。しかし、彼等は、作者と同じように最後には失敗する。“Winter Dreams”の次の一節は、このことを言っている。“often he reached out for the best without knowing why he wanted it — and sometimes he ran up against the mysterious denials and prohibitions in which life indulges.”⁵⁾

富の追求は、彼の時代の特徴でもあったが、Kazin が言ってるように、Fitzgerald が人生を見る手段でもあった。しかし、描かれたものは、彼の夢であった。彼の作品の特徴は、いくつかあるが、その一つは、物語の進行につれて主人公が作者に似てくることである。Gatsby も Dick Diver も作者ではない人物として書き始められるが、やがて、作者自身になっている。彼の個人生活は、他人の立場に自分をおいて見る同情的態度によって拡大されたから、彼自身を描く方が、発明した人物や単に観察した他人の生活を描くより遥かに面白い。彼の文学は、変装した自叙伝 (disguised autobiography) であるが、自分でもこういつている。“Books are like brothers. Amory in This Side of Paradise my younger, Anthony in The Beautiful and Damned my worry, Dick my comparatively good brother, but all them far from home.”⁶⁾ Winter Dreams の Dexter Green も Babylon Revisited の Charlie Wales も Absolution の Rudolph Miller も同じ事である。Fitzgerald は、こうした自己の夢と挫折を見事に作品の中で自己投影して見せてくれた。この研究論文では、三つの作品 “Winter Dreams”, “Absolution”そして “Babylon Revisited”の中で、どのように作家 Fitzgerald の考え・思いが込められて、どのようにそれらが投影されているかを見てみたい。

先ず、“Winter Dreams”について考えたい。この作品は、1922年に書かれ、The Metropolitan Magazine において、12月号に発表になった。これは、一言でいうと、富の世界への夢である。西部の田舎の少年である主人公 Dexter Green は、14才で、ミネソタ州のある湖のほとりにあるゴルフ場で caddie をしている。主人公 Dexter Green の ‘green’ の色は、Fitzgerald 文学において symbolic color をなしており、「希望」を連想する色で「夢」へ通じる色である。彼は、空想力の強い少年で、秋から冬にかけてゴルフ場が閉鎖し、一面が雪に覆われると、ski を履いて滑りまわりながら、将来の自分の夢を見るのであった。Dexter が雪のためにゴルフ場が閉ざされる長い冬の間に見る夢は、夏にゴルフ場にやって来る金持ち達の華やかさへの憧れとなって行く。Fitzgerald の分身である Dexter と初恋の女性 Ginevra King の生まれ変わりである Judy Jones が初めて会ったのは、Dexter が caddie をしていたゴルフ場だった。Dexter は、中流の食料品店の息子だった。一方、top class の少女である Judy は、11才で、大金持ちの娘だった。Dexter は、その少女

を見つめているうちに、目をそらすことが出来なくなった。彼は、少女の caddy を頼まれたが、それを断ると、さっさと caddy の仕事をやめてしまった。Dexter は、彼女の属する世界に憧れを抱いており、その世界に召使として奉仕することには耐えられなかったのである。

しかし、Dexter が金持ちに憧れたからといって、彼が俗物だったという訳ではけっしてない。彼は、きらきらとした物やきらきらとした人々との交際を求めたのではなく、きらきらとした物自体を欲したのであった。彼は、自分自身の力で、富が提供するあの優雅な世界に入りこもうと決心する。

ゴルフ場をやめてから数年後に、Dexter は、東部の大学を卒業し、故郷の近くの町へ帰って cleaning 屋の共同経営権を買い取る。その仕事は大成功をおさめて、彼は、間もなく cleaning 業の大きな chain store の持ち主になった。

10年たって Dexter は、今や23才のれっきとした青年実業家に成長した。ある日、自分が caddy をしていたゴルフ場へ play に誘われる。そこで成功した Dexter は、Judy に偶然に出会い、romantic な恋愛に陥る。しかし、Ginevra と同様 Judy は、flapper だった。彼は、彼女をとりまく一ダースの男の一人にすぎないことを悟った。間もなく彼は棄てられる。25才で、Dexter は、別の誠実な Irene Scheerer と婚約する。だが、結婚の寸前、Judy が再び彼の目前に現われ、彼に興味を示す。Dexter は、Irene との婚約を破棄し、再び Judy の虜になる。しかし、それも一ヵ月しか続かず、また彼は棄てられる。Dexter は、cleaning 店の権利を売り払い、New York へ去る。32才で、Dexter は、New York で実業家として大成功を収めている。

ある日、彼の事務所へ商用でデトロイトから訪ねてきた男が、思いがけず Judy の消息をもたらした。それによると、Judy は、今では結婚して子供まであるが、亭主というのが放蕩者で、彼女は苦勞しているという話であった。その上、27才をむかえた彼女は、すっかり老けてしまって、今では少しも美しくないという話であった。Dexter は、Judy を失い、彼女のことは諦めていた。ただ美しい Judy の幻を抱いて生きていたのだ。それが、今、まだ27才にしかないはずの Judy が「色あせた」ことを知り、深い幻滅を感じるのだ。

Dexter は、金持ちの世界に憧れを抱いている。しかし、それは、お金そのものを欲したのではなく、富が可能にするなにか優雅なものに引き付けられたのである。Judy という女性——金持ちでわがままだが、華麗な少女は、彼にとってそういう世界を代表する存在であった。Dexter は、そういう彼女と、彼女が代表する世界を過大に理想化し、それを手に入れることに一生の夢を託する。そういう彼の“冬の夢”には、一種の生命力 (vitality) が潜んでいる。それが彼の支えとなって人生の道を歩ませる。

“Winter Dreams”の淡くはかない青春の夢は、The Great Gatsby へと続きその終焉をみる。この物語は、若き日の彼の愛と金と社会的地位に対する気持ちをよく表している。20年代の spokesman である Fitzgerald の代表作なり、人生なりがこの“Winter Dreams”の縮図になっているといえる。この短編は、Fitzgerald の Ginevra King との初恋が素材になっている。Fitzgerald は、Ginevra に感じたと同様な喪失感をここに描き出している。

次に、“Absolution”について考えてみたい。これは、Fitzgerald が The Great Gatsby の prologue として元来意図して書いたものである。“Absolution”は、1923年に書かれて、1924年に The American Mercury に発表された。この作品は、作家 Fitzgerald の11才頃の少年期の回顧と考えられ、彼の倫理感を率直に、表面に打ち出した短編になっている。

11才の Rudolph Miller 少年は、catholic の家庭に育って、告解にいかねばならないが、それが嫌でたまらない。「僕は決して嘘をつきません。」と告解で嘘をついてしまった。又、ある少女に恋したり、聖体拝領を避けようとして、父親からひどい折檻をされる。ここに出てくる司祭は、信仰と世俗的な煩惱との間にあって、狂的に煩悶している。きらびやかな世界への誘惑、それは作家 Fitzgerald 自身の中にある、悪魔であり、信仰上の回想が、重心をもって描かれている。

Rudolph は、11才になる運送屋の息子で、一ヵ月以上も教会の告解へ行くことを怠り、父に叱られたので、いやいやながら告解へ行くのである。しかし、自分の犯した罪の程度を、認識することが未だなかなか出来ない。物心つく幼時に、何かをやれば、自分の良心に問うて、「悪」の行為を反省し、精神面に眼を向けざるを得ない宗教生活を幼くして経験し始めている。少年は、11才であって、Schwartz 神父の懺悔室に坐っている。彼は、神を恐れる少年である。けれどあまり、同じ懺悔をさせられるのに飽きている。そこで神父から「嘘をついたことはないかね」と尋ねられた。とたんに「いいえ、嘘なんか、決してつきません」と答え、得意になる。少年は、Blatchford Sarnemington という名前の英雄を空想する。これは、Rudolph とは違って、一切の善悪を越えた英雄であり、自分の想像力に依って、自由に振るまっている男で、つまりこの英雄は、Rudolph が、自分もそうありたいと願いながらも、なれないでいる人物なのである。即ち、少年の alter ego である。

Rudolph は、教会を出ると、大気を吸いこんで、Blatchford Sarnemington の名を繰り返し、得意になって家路へつく。家に近くなると、今度は神に対して嘘をついた恐怖にかられる。彼は、こんな汚れた心で、聖餐は受けられないと考え、明朝「水をうっかり飲んだ事」にして聖餐を逃れようと計る。彼の父は、頑固な catholic 信者で、厳格である。

catholic の家に生まれて、幼い頃から Catholicism の空気にふれた作家 Fitzgerald が、自分の犯した罪に悔悛の情を抱き、神への告解を励むなら、神は納得して、罪は赦されるという、catholic の教理を倫理観の基本として、終始、この Catholicism の影響が彼の創作姿勢に働いていた事実は、見逃すわけにはゆかぬ、彼の強い道德感覚の基調となったものである。それを作者は、この短篇の中で始めて赤裸々に率直に表面に打ち出している。しかも罪の問題を考える場合にも、この作品では、11才の少年の心理状態を通して、解釈を下そうとつとめている。自分が犯した罪を、後悔して改悛の情にかられていることを、あらゆる力をしぼって、神に納得してもらわねばならない。「それは恐れからではなくて、神様を怒らせたがためである。神の感情を害ねたためである。」と、気がつき決心するけれど、他方、また心の中では、告解場に入るのが、心臓が止まる程いやで仕方がない、——帰ってしまいたい。そして母親に嘘を言って誤魔化そう、かとも、しきりに迷う。いたずら盛りの少年に自意識が、芽生えようとしている頃で、自分は両親の子にしては

出来すぎていると、不敵な言も呟く少年でもある。

次に、“Babylon Revisited”について考えてみることにする。この作品は、1931年に書かれて、Saturday Evening Post の1931年2月号に発表になった。これは、後期の作品で、彼の書いた最も勝れた短篇である。病気の妻、一人娘、酒癖の治らぬ自分、に対する気持ちを土台として書かれている。

Babylon とは、旧約聖書にある‘悪徳の都’Babylon のことであるが、この中では主人公である35才のアメリカ人 Charles Wales (チャーリー) にとって悪徳の思い出の都 Paris をさしている訳である。即ち、1929年の例の大恐慌の前、アメリカ人たちが乱痴気騒ぎをやっていた Paris は、現代の Babylon である。その Paris にチャーリーは再訪する。

チャーリーは、Paris の Ritz hotel の bar に一人、腰を下ろしている。彼は、3年間、Paris を留守にして、今帰ってきたところだが、すっかり寂れてしまった町の様子に感慨を禁じ得ない。3年前までは、このあたりはアメリカ人で賑わったものだった。その頃は金のあり余ったアメリカ人が酒と Party に明け暮れる歓楽の生活を繰り広げていた。しかし、1929年の大恐慌を境にして、その多くは本国に帰ってしまい、今チャーリーが昔の友人の消息をバーテンに尋ねてみても、ほとんど一人としてこの町には残っていない。チャーリーも3年前にはずいぶん、馬鹿げた毎日を送ったものであった。

チャーリーは、現在35才、なかなかの好男子である。そして、一人娘 Honoria と再会する。彼は、2年程前、Paris を去って、Prague に行ったのだ。20年代の Paris では、彼は、放蕩のかぎりを尽くしたのである。金を湯水のように使った。band に一曲演奏させては、千フラン札を与えた。bar で酒をあびるほど飲んだ。ふとしたことから妻 Helen と言い争い、後から帰ってきた妻を吹雪の中に閉め出したままにした。雪の中を歩き回った妻は、それが原因で、心臓発作で、帰らぬ人となった。

彼は、一人娘の Honoria を妻の姉夫婦 Peters のもとに託し、一人で Prague に行った。そこでは Paris 時代の放埒な彼を知る人はいなかった。彼は、熱心に真面目に働いた。今では人間的にも経済的にもすっかり立直った。こうして身も心も安定した彼は、今、妻の忘れ形見の娘 Honoria を引き取ろうと、Paris を再訪したのである。

彼は、今も心の底から亡き妻 Helen を愛していたし、娘 Honoria に対する責任を果たすことが、せめて亡き Helen への罪ほろぼしのような気がしていたのである。彼が義理の姉夫婦の家を訪れると、Honoria がとび出してきて、魚のようにピチピチと跳ねまわりながら彼の腕に飛び込んでくる。Helen の姉 Marion は、当然の事、彼に対して好意を抱いていない。昔のことを言い出して、なかなか Honoria を彼の手に返そうとはしない。妹を殺したのはチャーリーだと信じていたからだ。チャーリーが翌日改めて Peters 夫婦の家を訪れた時は、次第に和らいでくる。Honoria をチャーリーに返すことにしぶしぶ同意する。その時、チャーリーのかつての飲み友達が、突如として、闖入してくる。このため、Marion の心は再び固く閉ざされる。そして、Honoria は引き渡せないと言い張る。チャーリーは、その夜夕食も共に出来ず、Peters 家をあとにする。

チャーリーは、その足で Ritz bar に行く。そこで一人感慨に更ける。3年前の自分たちの金にあかせた乱脈な生活ぶりが思い出される。金と歓楽に明け暮れて、人間性の真実味を失った生活である。あんなに愛し合っていた Helen と彼であったのだが、喧嘩が絶えず、ついに彼女の死を招いたものはそういう放埒な生活の故ではなかったか。

彼ももう若くはなかった。自分一人の快楽や夢を楽しむ青年ではなかった。彼は、娘が欲しかった。それ以外のものは、なにもかも、大した価値がないように思われた。チャーリーは、過去の過ちを悔い改め、立派に立直り、今、娘の Honoria (honor, つまり名誉) を取り戻せるかに思えた。ところが、昔の悪友が現われ、その希望が阻まれてしまったのである。

この短篇が発表されたのは、1931年だが、その前々年の29年10月には、例の経済大恐慌がはじまり、Paris の乱痴気騒ぎも経済的基盤を失ってしまい、多くのアメリカ人は、Paris を去っていた。そして、翌年の30年の初めに、妻 Zelda が初めてはっきりとした精神錯乱の発作をおこすと、医者がその原因はなにか先天的なものであり、Fitzgerald とは関係がないと言明したにも関わらず、Zelda 側の親戚の中には、彼こそその原因であると非難するものもあり、彼は、そこに自分たちの乱脈な生活と、特に彼自身の飲酒癖とを結びつけて考えざるを得なかった。妻 Zelda は、精神病院に入れられた。Jazz Age を華やかに過ごした Fitzgerald にとっては、ここで20年代の放蕩の高いツケを払わされることになったと思われたのであろう。高い罪の償いなのだ。その後悔の気持ちと妻への憐れみが、また作家の深い感慨が、この作品に色濃く表れている。この作品が書かれたのは、Zelda の発作のあった年の暮れである。

チャーリーは、雪の降る戸外に、一晩中、妻を閉め出した。そのため妻 Helen は、肺炎になり、遂には、心臓病で帰らぬ人となった。その悔恨に責められながら、彼は、Marion にあずけている一人娘 Honoria を引き取りたい気持ちで、Paris へ出てくる。主人公チャーリーの苦悩は、妻 Zelda が発狂した作家 Fitzgerald 自身のものである。また一人娘に対する憐憫の情である。

また、作家 Fitzgerald 個人の衰亡は、奇しくも、1920年代から30年代へと移行するアメリカ経済の衰退と時期を一にしたので、そういう社会相が、この作品に色濃く影を落としている。1929年の大恐慌で、故国からの仕送りの途絶えた Paris のアメリカ人たちは、続々と帰国しなければならなかった。その数年間の激しい移り変りが、作中の舞台となるのである。

この物語は、Tender Is the Night (1934) とは異なり、妻その人は登場せず、ただ思い出の人として描かれている。終始、妻をなくした夫の立場から、その哀愁が綿々と描かれている。読者は、そこに無限の優しさを感じる。

このように彼の作品は、自伝的色彩を帯びている。幼小の頃から晩年に至るまで、いやもっと彼自身の将来の姿まで、想像して、その時、その場の、作家の感情や感覚が生き生きと、彼自身の体験を通して表現されている。彼の作品中の悲壮な人物と彼の伝記を比べて見ると、彼は、文学を地で行ったという感じがする。そして彼の描く人物は、彼と同じ社会的地位の人物であるから、一層作者の気持ちがでてくる。彼は、身をもって時代を体現した作家であった。即ち、Fitzgerald は、1920年代・30年代という時代を、身をもって生き、体験したまを、自己投影して、作品

に描いたのである。

REFERENCES

- 1) Arthur Mizener. *The Far Side of Paradise*, Boston : Houghton Mifflin, 1951.
- 2) Alfred Kazin. *F.S. Fitzgerald : The Man and His Works* : The World Publishing Co., 1951.
- 3) Merle Curti. *The Growth of American Thought*, New York : Harper and Brothers Publishers, 1951.
- 4) F.L. Allen. *The Big Change : America Transforms itself 1900 - 1950*. New York : Harper and Brothers Publishers. 1952.
- 5) Joseph Wood Krutch. *The Modern Temper : A Study and A Confession*. New York : A Harvest Book, Harcourt, Brace and Company, 1956.
- 6) James E. Miller, *The Fictional Technique of Scott Fitzgerald* ; The Hague : Martinus Nijhoff, 1957.
- 7) Charles E. Shain. *F. Scott Fitzgerald*. Minneapolis : University of Minnesota Press, 1961.
- 8) Andrew Turnbull. *Scott Fitzgerald : A Biography*. New York : Charles Scribner's Sons, 1962.
- 9) Eble, Kenneth. *F. Scott Fitzgerald*. New York : Twayne, 1963.
- 10) Goldhurst, William. *F. Scott Fitzgerald and His Contemporaries*. Cleveland : The World Publishing Co., 1963.
- 11) Henry Dan Piper. *F. Scott Fitzgerald : A Critical Portrait*. Southern Illinois University Press, 1963.
- 12) Arthur Mizener. *F. Scott Fitzgerald*. N.J. : Twentieth Century Views, 1963.
- 13) Andrew Turnbull *The Letters of F. Scott Fitzgerald*. London : Bodley Head, 1964.
- 14) K.G.W. Cross. *Scott Fitzgerald*. (Oliver and Boyd, Edinburgh and London, 1964).
- 15) Sergio Perosa. *The Art of F. Scott Fitzgerald* (Ann Arbor, The University of Michigan Press, 1965.
- 16) John Kuehl. *The Apprentice Fiction of F. Scott Fitzgerald 1909 - 1917*. New Brunswick, N. J. : Rutgers University Press, 1965.
- 17) Malcolm Cowley. *Fitzgerald and The Jazz Age*. New York : Charles Scribner's Sons, 1966.
- 18) Bryer, Jackson R. *The Critical Reputation of F. Scott Fitzgerald : A Bibliographical Study*. (Hamden, Conn.) Archon Books, 1967.
- 19) Lehan, Richard D.F. *Scott Fitzgerald and The Craft of Fiction*. Carbondale, Southern Ill. Univ. Press, 1967.
- 20) Hindus, Milton. *F. Scott Fitzgerald : An Introduction and Interpretation*. New York : Brandeis University, 1967.
- 21) Robert Sklar. *F. Scott Fitzgerald : The Last Laocöon*. Oxford University Press, 1967.
- 22) Richard D. Lehan. *F. Scott Fitzgerald : The Man and His Works*. Forum House, 1969.
- 23) Bruccoli, Matthew J., and Jackson R. Bryer, eds. *F. Scott Fitzgerald in His Own Time : A Miscellany*. Kent, Ohio : Kent State University Press, 1971.
- 24) Higgins, John A. *F. Scott Fitzgerald : A Study of the Stories*. Jamaica, N.Y. : St. John's University Press, 1971.

(平成 5 年10月29日受理)